



## 特集 戦争を終えるために

### 韓国非武装地帯のカトリック教会と日米韓平和フォーラム

■ 長澤裕子（台湾 中央研究院近代史研究所、訪問学者）

2023年10月25日から、大韓民国（以下、韓国）の京畿道坡州市（キョンギド・パジュシ）で開催された国際フォーラム「DMZ to Hiroshima：北東アジアの平和のための韓・米・日宗教の役割」にパネリストの一人として参加した。朝鮮半島情勢などの研究者と日米韓のカ

トリック教会の司教や「正義と平和協議会」事務局、日韓の司祭と韓国の修道女や日米韓の青少年など総勢約70名が参加した。フォーラムは、韓国カトリック教会の「民族和解委員会」（委員長：キム・ジュヨン シモン司教）と議政府（ウイジョンブ）教区パジュ市のカトリック北東

アジア研究所（所長：カン・ジュソク ペトロ神父）の共催で、「懺悔と贖罪の大聖堂」（写真1、以下、懺贖聖堂）で開催された。議題は、核軍縮・核兵器廃棄や戦争と平和、原子力爆弾や植民統治の加害と被害、ドイツの脱原発政策と雇用喪失、朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）の温暖化など多岐に及んだが、会議を通じてカトリックの視点から、互いの痛みを知り信頼関係を築くプロセスを経験できた。

パジュには、北朝鮮をめぐる韓国社会の複雑な心理が混在している。フォーラム会場の「懺贖聖堂」は、韓国の海上軍事境界線である「北方境界線」（NLL：Northern Limit Line）に近く、教会周辺の道路名は「自由路」「必勝路」で、近隣には「統一」という名が付いた施設もある。教会の敷地からは北朝鮮のギジョンドン（開城特別市機井洞）が見える。ギジョンドンは非武装地帯（DMZ：Demilitarized Zone）内に設置された北朝鮮側の民間人居住地域である。DMZ内には、朝鮮戦争（1950年6月25日勃発～1953年7月27日休戦協定締結）の休戦協定に従い、南北一つずつ、民間人が住める村が建設された。韓国側ではパジュ市のテソンドン村がそれにあたる。ふたつの村の距離はたったの1.9キロだが、両国は休戦中のため、村の間には軍事境界線（MDL：Military Demarcation Line）がある。

冷戦の最中、南北の分断国家の最前線に築かれた二つの村は、「宣伝村」と呼ばれる。村には相手側に見えるよう国旗が掲げられ、韓国は資本主義の豊かさを、北朝鮮は社会主義の理想をアピールしている。テソンドンは国連軍司令部と韓国軍の管理下にあり、1960年代後半まで住民に韓国の住民登録証も発行されず参政権も付与されなかった。フォーラムの1ヶ月前の2023年9月、パジュ市議会は、米軍の軍事作戦で1967年10月から1971年12月の間にテソドンに散布された枯葉剤の健康被害の実態調査と補償に乗り出した。ごく最近のことである。

パジュにはテソンドン以外にも、「統一村」（1973年建設）、「ヘマル村」（1998年から建設、2001年分譲）という、朝鮮戦争でMDL周辺のか



(写真1) 南北統一と平和を祈り教育の場「懺悔と贖罪の大聖堂」(The Catholic Church of Repentance and Atonement) (京畿道坡州市、2008年健立)

つての住宅や土地を無くした「失郷民」のための「政策村」がある。朝鮮戦争の結果、南北の境界線は、日本敗戦後に戦勝国の米ソが南北を分割統治した北緯38度線から、MDLに変わった。北緯38度線は東西を結ぶ直線だが、MDLは右肩上がりの線で、朝鮮半島の西部は北朝鮮側に、東部は韓国側の領土に編入された。戦争の前後でMDL周辺の領土が南北で入れ替わり、住む場所を失った「失郷民」が生じ、南北で家族が生き別れになった「離散家族」が発生した。

パジュの「懺贖聖堂」は、故キム・スファン ステファノ枢機卿の提案により、朝鮮戦争を悔い改め、民族の和解と一致のための祈りの場として2008年に設立された。2018年、同教会は160余ある韓国の聖地のひとつとして「北朝鮮地域の殉教者記念巡礼地」に指定された。「懺贖聖堂」と敷地内の「民族和解センター」（以下、センター）は、日本の植民統治期に朝鮮の北部（現在の北朝鮮）に建設後、朝鮮戦争で倒壊したり、建物としては現存しても南北分断で訪問できないカトリック教会をモデルとしている。聖堂内部は、聖ベネディクト会徳源修道院（咸鏡南道元山市徳源）、そして聖堂の外観はチンサ洞聖堂（平安北道新義州眞沙洞）を再現した。センターの建物は、メリノール宣教会の本部（ピョンヤン直轄市ソポ（西浦））を復元した（写真2）。聖堂内部の前面中央にある祭壇上部のガラスモザイクは、南北の殉教者がキリストの平和を求め、朝鮮半島の平和と一致のために共に祈る姿を描いている。韓国のイコン研究所長のチャン・



(写真2) チンサ洞聖堂（1924年建立）  
朝鮮半島の伝統的な建築と西洋式を取り入れた

朝鮮に近い中国・丹東で作成した。聖堂の後方の壁には、朝鮮戦争の前後に北朝鮮で殉教した「第6代平壤教区長ホン・ヨンホ フランシスコ・ボルジア司教」と「初代咸興教区長ボニファシオ・サウアー大修道院長」の顔写真のガラスモザイクがある（写真3）。ふたりをはじめとする韓国・ドイツのカトリック教会関係者38名は、現在、バチカンの教皇庁列聖省で、朝鮮戦争前後の殉教者として「福者」の認定審査中である。

フォーラムの日程中、訪問したMDLから4キロの距離に位置する「韓国JSA聖堂」（写真4）は、MDLに最も近い教会である。2019年、アッシジの聖フランシスコを記念し、南北朝鮮の「平和・許し・和解」を願って創立された。教皇ヨハネ・パウロ二世が、世界中の宗教指導者たちと「平和の祈りの会」を行ったイタリアのアッシジのサンタ・マリア・デッリ・アンジェリ（Santa Maria degli Angeli）教会をモチーフとしている。教会の鐘楼の高さは15.3メートル。復活したイエ



(写真3) 懺贖聖堂の後部  
初代咸興教区長ボニファシオ・サウアー大修道院長  
(ドイツ・ザンクトオットティエン修道院所属)

スに会った使徒ペテロが、ガリラヤ湖に網を投げて収穫した153匹の魚の奇跡を形象化した。

フォーラムのミサ当日、JSA教会の主任司祭が軍服・軍靴を着用して現れた。同教会は国連軍の管理下、韓国カトリック教会の「軍宗教区」として運営されている。

グンソン ヘロニモ神父が下絵を描き、北朝鮮最高の技術と言われるピョンヤンの「万寿台創作社」の壁画作家7人が、北



(写真4) 軍事境界線に最も近い教会「JSA聖堂」  
(JSA Roman Catholic Church)  
(京畿道坡州市、2019年建立)

職業軍人や兵役中の民間人の宗教活動のために、朝鮮戦争中の1951年に韓国軍の「軍宗制度」が始まった。韓国軍の「軍宗制度」は1950年代、キリスト教が独占し、仏教界が許可されたのは1960年代に入ってからである。韓国カトリック教会の統計によると、二十歳代前半の男性の洗礼者数は兵役中に通える軍宗教会が圧倒的に多い。それだけに「軍宗教区」の洗礼数の多さについては、宗教と軍の関わりを警戒して批判する声もある。

何よりも韓国社会の中では、北朝鮮をめぐる認識は保守とリベラルで対立し、彼らが「南南葛藤」と呼ぶほど社会の大きな分断の原因となっている。同民族の戦いが冷戦の国際戦の中で繰り広げられた朝鮮戦争。韓国のカトリック信者の中でも、北朝鮮との「融和」や「対北経済支援」「統一」に反対する保守的な意見も強い。

国家間の戦争の結果、同一の社会に被害者と加害者が共存するのは韓国だけではない。フォーラムでは、朝鮮戦争や第二次世界大戦に対する米国の責任に加え、米軍人の戦争被害、そして日本の植民統治や戦争の責任と広島・長崎における日本人の被害、朝鮮人や中国人の被害についても論じた。広島平和記念公園および広島平和資料館も団体を訪問し、世界平和記念聖堂でのミサも行った。朝鮮半島の南北関係に加え、日米韓が過去の戦争のような対立関係から自由になるには、今後もお互いの傷や違いを理解しようとする傾聴の場が必要であろう。フォーラムに関心を持ち、対話の場に加わる人の輪が広がり、交流がさらに長く続くことを願っている。

## ガザの人々に寄り添い、覇権より人権を重んじる市民の連帯を

### 大河内秀人（認定NPO法人パレスチナ子どものキャンペーン\*代表理事、浄土宗僧侶）

インドシナ難民問題が起きていた1980年に大学を卒業し僧侶となった私は、カンボジア難民救援募金をきっかけに、アジアの仏教国に関わるNGOの活動に参加していました。湾岸戦争を機会に宗教者として中東問題がこれから重要だと思い「パレスチナ子どものキャンペーン（CCP）」に参加しました。以来、オスロ合意、暫定自治という東の間の希望もあったものの、空爆や侵攻、入植地の拡大、封鎖、分離壁など最悪が更新され続けてきました。暴力や不当な人権侵害に対して、正平協の皆さまとも一緒に声を上げてきましたが、今般の桁外れの攻撃には無力感に打ちのめされる毎日です。

CCPとしては、それでも必死の思いで活動を続ける現地スタッフと連絡を取り合い、限られたルートで支援金や物資を必要としている人に届けています。CCPとして通常行ってきた障がい児はじめ困難な状況にある子どもや戦争のトラウマを抱えた子どもへのケア、空爆や侵攻による被害への緊急支援の経験とノウハウを生かし、可能な限りの支援をおこなっています。多くの方々のご支援ご協力により、また現地スタッフによる爆撃の隙間を見ながらの献身的な活動により、12月22日時点で、すでに約1500万円分の現金または物資を、目標とする1000世帯（約1万人）の半分以上に配ることができました。

食料、燃料、医薬品も不足し健康・栄養状態も危機的で、特に妊産婦と子どもたち

に重大な影響が出ています。そこにさらに爆撃や銃撃がついてまわります。何重もの死と隣り合わせなのです。何十年も理不尽、不公正に虐げられてきた人々が、さらに追い詰められています。もちろん戦争を停めることが一番ですが、とにかく今は生きるための支援をするしかありません。現在、支援物資を送るため、CCPの日本人スタッフがエジプトと行き来をして、物資搬入が許可されている限られた現地団体と調整を行い、それがようやく軌道に乗ろうとしています。（写真1、2）

ガザでは医療施設や避難所まで爆撃され、毎日100人単位の犠牲者が出ています。CCPでは現在、できるだけなまの現地情報を日本社会に伝える活動を続けており、毎日、国連機関の発表とともに現地スタッフの声を、東京事務所からYouTubeで配信しています。

そして日本の人々に考えてほしいことは、イスラエル・パレスチナに限らず、今の世界が分断され対立している本質は、宗教でも、民族でも、国と国でもないということです。

実際私たちはイスラエルの平和活動家ともつながっています。私自身もキリスト教やイスラム教の人、韓国や中国の人とも平和のネットワークを持っています。イスラエルでは戦争状態になると、平和を口にすれば極左とみなされます。日本でも隣国への憎悪が煽られ軍備増強に反対すれば非国民扱いされます。イスラエルが封鎖や入植

地の拡大、モスクへ踏み込みなどの挑発をすればパレスチナやの武闘派や原理主義がテロ行為に及び、それが憎悪を煽りイスラエルの極右が力を得ます。どこの世界にも、差別と排除をしたい勢力と、平和と人権を尊重し認め合い信頼で成り立つ社会をめざす人々がいます。多くの人々はその間にいて、状況・空気によって立場を変えます。政治・経済・マスコミが人々の欲望、憎悪を煽り、情報をコントロールすることで、好戦的な勢力の側に人々が絡めとられます。対立はそれぞれの社会の中、あるいは人々

の心の中にあり、公正で平和で人道的なビジョンを共有することが真の救いとなります。国連も総会や安保理に失望させられることは多かったです、NGOも参加してつくられる人権条約の精神などは宗教を超えて共有できるものです。私たち宗教者は、それぞれの信仰に基づいて人々を、覇権から人権へ、狂気から正気へと導く努力を諦めずに続けていきたいと思えます。

\*パレスチナ子どものキャンペーンのホームページ  
<https://ccp-ngo.jp/>



(写真1、2) エジプトからの物資



(写真3) ガザ南部ラファでの水配布の様子

# パレスチナ民族浄化としてのナクバの歴史（前編）

## ■ 原田雅樹（ドミニコ会司祭、関西学院大学）

### なぜ「ナクバ」の歴史を語るのか

ユダヤ人国家をパレスチナの地に成立させるという信条と実行計画を決して譲らないシオニズム。現在まで100年に及ぶパレスチナ戦争の間に、シオニズムは「自分たちこそが絶対の正義である」という強力な記憶とフィクションを構築しながら、イスラエル国家を手に入れ、強大な軍事力を手に入れ、核兵器を手に入れ、さらに「ショアー」\*に対するヨーロッパ人の良心の呵責を利用しながら、欧米各国を味方として手に入れてきた。語られる歴史（ホロコーストや2023年10月7日の出来事など）と語られない歴史（「ナクバ」（後述）や2023年10月7日以前に西岸で起きていたこと、トランプ政権下でどれだけパレスチナのことを忘却させようとしてきたかなど）の間の大きな差が、不正義の温床になるということを念頭におきながら、このシオニズムに必然的に伴って発生したパレスチナ民族浄化の歴史、ないし「ナクバ」（アラビア語で「大惨事」）の歴史の概略を述べることにする。

### シオニズムとバルフォア宣言

19世紀末に、「民なき土地を、土地なき民に」をスローガンに、ヨーロッパでユダヤ人知識人テオドール・ヘルツェル（1860-1904）らによって始められたシオニズム運動。それは、西欧でのユダヤ人差別と迫害、ロシアでのポグロムと呼ばれるユダヤ人に対する集団的迫害、国民国家の成立を背景にしたユダヤ人の民族主義、そしてヨーロッパの植民地主義に深く結びついたものであった。さらにはそこに至福千年説（千年王国説）を唱える19世紀のキリスト教、すなわち神は1000年間悪魔を閉じ込め、キリストや復活した聖人にこの世を支配させて地上の王国が出現するが、やがてキリストが再臨し終末の審判の時がくるという考え方をする一部のキリスト教プロテスタントが絡み合った。

第一次世界大戦中、ヨーロッパ諸国の各政府は、「キリスト教の」パレスチナをオスマン帝国から切り離したいと考え始める。そこでは至福千年説を起源とし、「約束の地」パレスチナへのユダヤ人の帰還が、キリストの再臨を早めると考える一部のキリスト教の存在も無視できなくなる。そして、大戦中の1917年、イギリスの外相バルフォア卿はシオニズム運動に対して、パレスチナにユダヤ人の民族的郷土を建設するという約束をするが、この「バルフォア宣言」は、パレスチナ人の民族独立という願望と衝突することは明らかであった。実際、1915年にイギリスはパレスチナ人に対して、彼らの住むパレスチナに彼らの国家を創るという「フサイン・マクマホン協定」と呼ばれる約束もしていたが、それら、イギリス政府の交わした矛盾する約束が、現在まで続く紛争への扉を開いた（〔1〕第2章）。

戦後、オスマン・トルコ領は、イギリス、フランス、ロシア帝国で分割統治するという「サイクス・ピコ協定」（1915年）に即して、パレスチナはイギリスが統治するようになる。そして、イギリス統治下のパレスチナには、多くのユダヤ人が入植するようになる。それに対してパレスチナ人も反乱を度々起こすようになるが、イギリス政府は激しくその反乱を弾圧した。それを機に、シオニストは武装手段をも用いながらその領土を拡大し続け、ユダヤ人のみからなる民族国家創設をめざす。それは、ヒトラー率いるナチスのユダヤ人殲滅作戦、すなわちホロコースト＝ショアーがヨーロッパで吹き荒れていた時にも続けられ、さらにこのユダヤ人国家という理念は軍国主義や軍隊と結びつけられなければならないと考えられるようになる。

### ショアーとナクバ

第2次世界大戦後の1948年、ヨーロッパが引き起こしたショアーとユダヤ人難民の責任をパ

レスチナ人に負わせるような形で、国連はパレスチナの地にユダヤ人国家を創設することを認めた。同年、第一次中東戦争が始まり、75万人とも言われるパレスチナ難民が発生するが、そこには、イスラエルの民族浄化作戦があった。

1948年3月10日、…古参のシオニスト指導者と若手のユダヤ人将校からなる11人の男たちが、パレスチナの民族浄化の最終調整を行った。その晩、国じゅうからパレスチナ人を組織的に追放する準備のため各地上部隊に命令が送られた。この指令には、人々を強制的に立ち退かせるために取るべき手段の詳細な説明が添えられていた。大規模な威嚇。村々や住宅地の包囲と爆撃。家屋や資産、物資への放火。追放、破壊。そして最後に、追放した人々が誰も戻ってこられないよう、瓦礫の中に地雷を敷設すること。…ヘブライ語アルファベットの第四字をつけたD（ダレット）計画の総仕上げであり、より実質的な第四次計画であった。（〔1〕 p. 3）

ここで、民族浄化は「複数の民族が混住する特定の地域や領域を一つの民族で均質にするために力づくで先住民を追放すること」と定義される。そして、追放はできるだけ多くの住民を立ち退かせることを目的とするため、実行する側は非暴力的なものも含めてあらゆる手段を使い、ある地域の歴史を抹消する（〔1〕 p. 14）。

1948年にイスラエルによってパレスチナ人に対して行われたことは、まさにこの意味での民族浄化であり、ナクバと呼ばれ、現在のパレスチナ、すなわちガザでの虐殺と破壊、ヨルダン川西岸（以下「西岸」と略記）での入植者による暴力的な土地奪取の原点となるものである。

追放のしくみが動きはじめ順調に進みだすと、政治指導部はある時点で積極的な関与をやめる。…巨大ブルドーザーが慣性力で自走し、作業が終わるまで停止しないのと似ている。計画を立てた政治家たちは、その下で押しつぶされ殺される人々に全く関心がない。ペトロヴィッチら研究者は、二種類の虐殺を区別しなければならないと注意をよびか

ける。一つはあらかじめ計画されたジェノサイドの一環としての虐殺であり、もう一つは民族浄化を実行せよという上官からの一般的な指令に後押しされたとはいえ、直接的には憎悪と報復による「計画的でない」虐殺である。（〔1〕 p. 15）

シオニズムを国是とするイスラエルのこの基本方針は、今日まで変わらない。この民族浄化の国是を正当化するために、「反ユダヤ主義」、「ナチズム」、「自衛権」、「人間の盾」そして「テロリスト」といった概念が濫用されるようになっていく。

イスラエル建国後、シオニストらとショアーを生き延びた者らの関係は必ずしも良好なものではなかった。イスラエル国家とショアーが理念的に結び付けられはじめるのは、イスラエル諜報機関モサドによってアルゼンチンで捕らえられたナチス・ドイツ元親衛隊ルドルフ・アイヒマンに対するエルサレムでの裁判、そして死刑判決を経た1960年代からである。この時期、国際的には植民地主義が終焉を迎え、イスラエルのパレスチナに対する植民政権が正当化されえなくなる。第三次中東戦争（1967年）以来、ショアーの記憶の操作と政治利用が顕著になり、それによってイスラエルのユダヤ人国家としての存在、そしてパレスチナに対する占領政策が正当化されるようになる。この占領によって、国際法を無視しながらイスラエルはパレスチナ経済が発達しないように図り、自立しないようにさせると同時に、パレスチナ人を差別的な環境の中でその労働力として使っていた。そして、1987年、第一次インティファダが生じる。抵抗するパレスチナ人は新たなナチスの象徴に仕立て上げられる（〔2〕 第6章）。

#### 文献

- 〔1〕 イラン・パペ 『パレスチナの民族浄化－イスラエル建国の暴力』、田浪亜央江他訳、法政大学出版局、2017年（原書2006年）
- 〔2〕 ヤコブ・ラブキン 『トラーの名において－シオニズムに対するユダヤ教の抵抗の歴史』、菅野賢治訳、平凡社、2010年（原書2004年）

\*注 ヘブライ語で「絶滅」という意味

# 「小さき画家たちの展覧会 ウクライナ難民の子供たちが描いた世界」を開催して 一壁ではなく橋を築く

## ● 鈴木和枝 (不二聖心女子学院 教諭)

ポーランドのクラコフにあるサンスター日本語学校を運営する兵頭 博先生とのご縁で、ウクライナからポーランドに避難してきた子どもたちが描いた絵の展覧会「小さき画家たちの展覧会 ウクライナ難民の子供たちが描いた世界」を2023年11月に不二聖心女子学院で行いました。この展覧会は兵頭博先生と関わりのある全国の方々の住む地域を巡るものです。

### 学校での展覧会開催のきっかけ

ロシアによるウクライナ侵攻が行われてから毎月24日に行われているオンラインの「ウクライナを覚えて平和を祈るキリスト者祈祷会」\*に参加したことが本校での展覧会の出発点です。この祈祷会は「日本キリスト教協議会」と「平和を実現するキリスト者ネット」、そして「日本カトリック正義と平和協議会」によるエキュメニカルな祈りの会です。聖書朗読、賛美歌、リタニー(連祷)を中心とし、月によってさまざまな方の平和についてのお話があります。2023年3月24日の祈祷会では、兵頭先生がポーランドに避難してきたウクライナ難民の受け入れや、避難民の人たちの状況、ウクライナの子どもや若者への支援を通して先生が感じられたこととお聴きました。テレビの報道などとは異なる、ウクライナの隣国ポーランドから見えるウクライナとその人々の状況を非常に具体的に感じることができました。

毎回、祈祷会の中では「いま、ウクライナの地を追われて生きている人たちがいます。どうぞ、今このとき、平和を実現してください。わたしたちを今まで以上に、行動する者とさせていただきます」と祈りますが、何も行動できていない自分をもどかしく思っていました。祈祷会のスタッフの方のご協力を得て先生に連絡をとると非常に喜んでくださり、サンスター日本語学校のウクライナの子どもたちへの手紙を生徒たちが書くこと

を受け入れてくださいました。また兵頭先生からは、帰国時に学校で兵頭先生による生徒への講演とウクライナの子どもたちの展覧会についてご提案をいただき、それぞれ実施させていただくことになりました。

### 子どもたちの安否は不明

兵頭先生が関わり、絵を描いたウクライナの子どもたちはずっとポーランドのその場所にいられたわけではありません。巡回する絵とともに展覧会で表示する紙が送られてきましたが、そこには「(子どもたちの)現在の安否は不明です」と書かれていました。皆その紙を見て、絵を描いた子どもたちがポーランドで安住できる状況にないことを知り、ショックを受けました。ポーランドはウクライナ難民に支援をしていましたが、いわゆる支援疲れが起り、兵頭先生が関わっていた炊き出し事業なども、あるとき突然終了が言い渡され、利用していたウクライナの人々に予告もできず、気の毒な状態で食料提供の場を終えることになったとうかがっています。ウクライナに戻った人もいたでしょうし、ポーランドに滞在しながらも言葉も通じず、仕事にもつくことのできない状況下で住む場所を探し、なんとか生活している人もいるのだと思います。短い間でも兵頭先生のところに滞在していた子どもたちが、ウクライナという故郷の情景を絵で表現することによって、日本で観る私たちに戦争で故郷を追われることの悲劇を伝え、私たちはウクライナの人々を忘れないでいようと思い、祈るのみです。ある生徒は、「絵画展を通して、今までニュースでしか得られなかったウクライナの方々の情報が、よりリアルに伝わってきました。特に小さな子が描いた絵からは、故郷への愛が伝わってくると同時に、その故郷は崩壊していて、いつ戻るかわからないという悲しみを受け取ることが出来ま

した。今はどんな状態に置かれているかわからないけれど、どうか希望をもって生きてほしいと思います」という感想を書いていました。絵を見た人たちに共通する願いだと思います。

## ウクライナの若者の思い

兵頭先生の生徒への講演では、ウクライナの若者とZoomをつないでくださいました。2023年の平和旬間に広島教区で行われた平和行事での講演会と同様に、先生はウクライナの子どもたちにオンラインでインタビューをしてくださいました。どちらの講演でもソフィアさんという10代後半の女の子が話をしてくれました。彼女はウクライナに在住し、空襲が頻繁に起こる中、必死に生き続け、兵頭先生の日本語学校の授業をオンラインで受講しています。

兵頭先生は、この戦争が起きてしばらくしてから、ウクライナへの支援はたくさんあるのに必要な人に届かない現状があり、何とかしたいと思ったそうです。SNSのテレグラムを使って、ロシアとの国境付近で恐怖の中で過ごしながら何か勉強をしたいと思っている若者に、オンラインで日本語を勉強してみませんかと呼びかけ、受講に至った一人がソフィアさんなのです。先生はウクライナの若者が受講するにあたり、何かボランティアをすることを学費の代わりに条件にし、ソフィアさんは動物愛護のボランティアをしているそうです。

ソフィアさんは、ウクライナでの生活が常に危険と隣り合わせの中にあり、戦争が始まるまでは大学への進学を志していたのにこの戦争で進学できず、友だちの安否も分からずとても悲しいと話していました。広島の講演ではウクライナを支援するならばロシアと闘うための武器が欲しいと述べ、本校の生徒の質問に対しても、ロシアへの敵対心を露わにし、武力を使わずに戦争が早く終わることを願う多くの日本人にとって、想像を超える言葉だと思いました。

ところがソフィアさんはそのような状況でも、オンラインでも勉強をすることができるようになったことが喜びであること、そのために動物愛護のボランティアをするようになったこと、それ



「小さき画家たちの展覧会 ウクライナ難民の子供たちが描いた世界」会場風景（不二聖心女子学院・静岡）

らによって友だちができ、頑張って生きていきたいという希望を持たたと話してくれたのです。絶望的状况にある人に希望をもたらし、命を繋ぐのは、人と人との間に架ける架け橋なのだと私は実感しました。教皇がたびたび話す「壁ではなく橋を築くこと」です。

## 壁ではなく橋を築く

人どうしの間に橋を架けていくには、つながりをつくるだけでも大変ですが、考え方の違いを乗り越える必要があります。橋を架けるには、ソフィアさんのような戦禍にいる人の思いが、時には、戦争をしていない国の多くの人の平和の理想や考えを越えるという現状があることを知って、これを受け止めることが第一歩でしょう。

「子どもは平和で国同士隔たりのない関係を望んでいるのに、大人によってそれを壊されてしまっているんだと考えさせられました。子どもはただそこに生まれてきただけなのに、とても辛い思いをしているんだと思うと心苦しくなりました」。これも絵を見た生徒の感想です。

壁を作らず橋を築く。大人として責任が果たせるよう、ウクライナの平和が早く来ることを祈り続けます。

\*ウクライナを覚えて平和の祈るキリスト者祈祷集会  
毎月24日20:00~ 毎回約40分程度。

以下のURL、またはZoomのミーティングIDから、お入りになれます。

<https://x.gd/1n3sC>

【ミーティングID】835 2674 8764

【パスコード】332126

どなたでも参加できます。ご参加をお待ちしています。

## シノドスから見たジェンダー正義

● 弘田しずえ（日本カトリック正義と平和協議会専門委員、ベリスメルセス宣教修道女会）

シノドスの第一セッションは2021年10月から準備段階が始まり、全世界の114の司教協議会から112の協議会、カトリック東方教会、23ある教皇庁各省からの17省、男子女子修道会国際総長連盟、さらに2000万が参加したデジタル・シノドスからの回答がまとめられ、次のレベルの大陸集会を準備するための文書「あなたのテントのスペースを広げよう」が、2022年の10月に発表されました。この文書は、「あなたは、今の教会に何を体験し、感じていますか」という問いかけに対して、多くの人が、教会から排除、差別されていることを苦しんでいることを明らかにした文書でした。まず、女性差別、LGBTQA+、離婚し再婚した人、多婚者などへの排除を指摘し、文書は次のように言っています。

「人々は、教会が完璧な人のための施設ではなく、傷つき傷つけられた人のための避難所であることを求めている。教会が、優越感ではなく、気遣いと誠実さを通して真の関係を築くことを望んでいるのだ…人種、民族、ジェンダー、文化、セクシュアリティに基づく差別や暴力に苦しむグループ」。さらに、女性差別を指摘する文脈において、女性の助祭職についても言及しています。カトリック教会の公式文書がこのような形で、LGBTQA+、女性の助祭職について述べたのは、始めてだったと思います。これまでは、無視するか非難するかに傾いていたのですが、今回は、教会が、彼らの名前、感情、歴史、夢を批判することなく、生きている人々を見ようとし、彼らの苦しみの現実に入り込もうとしたのです。

### 違いを受け入れる教会となる課題

残念なことに、2023年10月29日シノドスの最終日に発表された〈まとめ〉からは、LGBTQA+の文字が消えています。ただし、性的指向とジェンダー・アイデンティティの異なる人々については、「社会だけでなく、教会においても新たな問いを提起している懸案事項として、識別プロセスを続ける課題」として指摘されています。

女性助祭については、すでに2016年教皇フランシスコが立ち上げられた委員会によっても、その歴史的存在は明らかにされており、教皇が承認すれば良いところまで来ているはずでしたが、〈まとめ〉には、今後も神学、司牧から研究を続けるという言及があるだけでした。

シノドスは、教会変革と刷新の一步前進を期待した人々にとっては、大きな落胆を与えているわけですが、丸テーブルに座り、対等の立場で、1ヶ月の間、体験を分かち合った「聖霊における話しあい」という会議の進め方によって、違いが対立や分裂にならずに、教会の多様性を実感する結果となりました。女性の助祭職については、女性の参加者の中でも意見が分かれ、〈まとめ〉の投票で最も「ノー」の多い項目となっています。一応3分の2の票で、文書には入っていますが、来年の第二セッションに向けて、識別を続けることが課題です。現在までの教皇庁教義省の文書では、イエスが男性であったことを理由に女性は司祭職に相応しくないと説明されています。突き詰めて考えれば、女性は、男性のように神の似姿ではないという差別が、これからも続くことを意味するのだと思います。違いを尊重し、誰も排除しないシノドスの教会となることを目指した第一セッションでしたが、違いを認めて一致する教会を目指すためには、まず違いを認めることに慣れていないカトリック教会のあり方そのものを見直す必要があるのではないかと思います。

### 第二セッションに向けて

女性の叙階、LGBTQA+などについて、第二セッションでは、何らかの結論が出されなければなりません。シノドス事務局次長であるSr.ナタリーは、多くの人びとからの意見を求め、「変化をローマからだけ期待することはない」と述べられています。また、個人であっても、直接シノドス事務局に意見を送るようにと勧め、教会のあらゆるレベルで、意見を送ることが必要です。



## 竜の声に耳を傾ける

市田真理 (第五福竜丸展示館学芸員)

2024年は、第五福竜丸が被災したことに端を発した「ビキニ事件」から70年です。第五福竜丸は1954年3月1日のアメリカ水爆実験に遭遇、被災しました。アメリカはこの年、6回核実験をおこなっており、実験場とされたマーシャル諸島も、日本の漁船や貨物船も放射性降下物＝死の灰により被ばくしました。「死の灰」はやがて、雨にまじって日本列島にも降り注ぎました。ビキニ事件とは「第五福竜丸だけ気の毒なことになった事件」ではありません。誰しものために命を脅かす「自分ごと」の危機でした。

ジョン・M・アリソン駐日アメリカ大使はビキニ事件発覚から2か月後、「FUKURYUMARU」と題した長文電報を本国国務省へ送っています。福竜丸のもたらした事件は「不愉快で不吉」なものであるとし、日本人の核兵器に対する恐怖の深さ、戦争で破滅するという確信の強さ、核について騙されやすい性格を列挙し、この事件が平和主義者や中立主義者を刺激していると警告しています。

果たして、核実験の中止を求める署名運動は瞬く間に広がり、3200万人を超える人たちが核兵器に反対の意思表示をしました。当時の日本の人口は約8000万人です。これはソ連との核開発競争のさなかにあって、米政府にとっては脅威でした。

米政府から日本政府に見舞金200万ドル（7億2000万円）が一括支払いされ、米国の法的責任を問わないことが確認されました。一方で米政府内では、反核世論が反米にならぬよう、心理作戦が展開されます。たとえば原子力委員会は「大規模な原子力平和利用博覧会の期待感調査」や「核兵器の効果に関する誤った観念を一掃するために冊子と映画によって継続的で集中的な宣伝活動に取り組むこと」などがTODOリストにあげられました。これらはみごと

に実現し、日本への原子力発電導入への露払いとなっていきます。

さて、今年辰年。第五福竜丸はしばしば「福竜」を直訳して「ラッキードラゴン」と呼ばれてきました。

東洋で竜といえば水神の扱いで、沼に生息していたり、雲の上にいたりして、雨を降らせる伝説や民話がたくさんあります。時に人びとを戒めたり、干ばつから村を救うこともありますし、コミュニティの掟を破ったものが罰として異形の者＝竜にされてしまうお話もあります。竜頭船は貴人の乗る遊楽船の舳先に竜の上半身が飾りつけられ、水難に遭わないとされてきました。いずれも自然への畏敬の念が竜を生み出してきたのだと思います。

それに対して西洋のドラゴンは悪魔の手下。どちらかというヒール（悪役）です。人びとから恐れられ、いけにえを求めるドラゴン退治で名をあげるのが西洋の英雄たちです。原爆製造の「マンハッタン計画」に参加した科学者の一人は、ウランやプルトニウムがどれくらいの量で臨界に達して核爆発するかを決定する実験を「眠れるドラゴンの尻尾をくすぐる」と表現しました。ひとたび目覚めたドラゴン＝核エネルギーは、人間の手には負えない危険性を孕んでいることをたとえたのです。もしくは制御可能というのが核エネルギーに対する傲慢な認識だとも言えます。

福竜丸は、決して幸福な竜ではなかったかもしれない。でも今を生きる私たちに、つねに警告を発する竜だと思うのです。「竜住む池は水涸れず」。竜が住んでいる池の水は決してなくなるといいます。この船があることは、平和への希望を涸らさないこと。そんなふう思うのです。

特集 戦争を終えるために

- 1 韓国非武装地帯のカトリック教会と日米韓平和フォーラム ..... 長澤裕子
- 4 ガザの人々に寄り添い、覇権より人権を重んじる市民の連帯を ..... 大河内秀人
- 6 パレスチナ民族浄化としてのナクバの歴史（前編） ..... 原田雅樹
- 8 「小さき画家たちの展覧会 ウクライナ難民の子供たちが描いた世界」を開催して 一壁ではなく橋を築く ..... 鈴木和枝
- 10 （連載第4回）話してみようか、「ジェンダー」のこと シノドスから見たジェンダー正義 ..... 弘田しずえ
- 11 （連載第10回）からし種、パン種、空の鳥 亀の声に耳を傾ける ..... 市田真理
- 12 まんが 連載第16回「神学生トマス」

表紙写真 朝鮮戦争で破壊した聖ベネディクト会徳源修道院（朝鮮民主主義人民共和国元山市）長澤裕子「韓国非武装地帯のカトリック教会」p.2 参照。

12月にお届けしたJP通信243号、9ページ、および12ページの記載内容に誤りがありました。

9ページ：（誤）岡谷 巧師 （正）岡山 巧師

12ページ：目次（誤）連載第23回「神学生トマス」  
（正）連載第15回「神学生トマス」

ここに謹んで訂正し、読者のみなさま、関係者のみなさまに深くお詫び申し上げます。



## 編集後記

2024年元日、能登半島で最大震度7の地震が起こり、津波に襲われました。亡くなられた方々のご冥福をお祈りし、被災された皆さまに心よりお見舞いを申し上げます。

被災地での救援活動、物資の支援の遅れが指摘されている。北陸電力志賀原発では、3メートルの津波により、変圧器から約2万リットルの油が漏れ、外部電源の一部が損傷した。原発事故の際の避難ルートとされていた「のと里山海道」が陥没して、一時全面通行止めになり、避難計画の前提となる原子力災害対策指針の非現実性が明らかとなった。「権力者の倫理的退廃は、豊富な手段を有する者が、世論を形成するために用いる便利なからくり、マーケティングや偽情報によって偽装されます。そうした仕掛けを用いて、著しい環境変化や高レベルの汚染をもたらすプロジェクトの実施計画の立案時には、想定される地元の発展、経済成長や雇用創出、生活向上の可能性を語り、しかもそれは子どもたちのためだなどといって、地元民に期待を抱かせます。しかし実際のところ本心では、地元民の未来についての関心などないのでしょう。＜中略＞そうした状況は、物理学や生物学にばかりでなく、経済そしてわたしたちが経済をどう捉えるかにも関係しています。最小限のコストで最大の利益をという考え方は、合理性、進歩、当てにならない約束によって偽装されていて、ともに暮らす家である地球へのまことの思いやりを、また、わたしたちの社会が見捨ててきた貧しい人々や困窮者たちへの支援を心に置いた生き方を不可能にします。近年、実に多くの偽預言者の約束に酔わされ舞い上がらされ、貧しい人自身が、自分たちのために造り上げられたわけではない世界に欺かれてしまうことが少なくないとわたしたちは知っています」。以上は、教皇フランシスコ使徒的勧告『ラウダーテ・デウムー気候変動について』p.24-25（カトリック中央協議会 2023年12月）から。

「すべてはつながっており」、能登半島の状況も、世界各地で起きている戦争、紛争も、私たちが最小限のコストで最大の利益をという考え方にとらわれ、「ともに暮らす家である地球へのまことの思いやり」を忘れ、何かを見捨ててきた結果ではないのだろうか。(h.)